

黒毛和種雌牛の育成期の適正な 栄養管理による収益向上

研究のねらい

渋川子牛市場には年間約 1,400 頭の黒毛和種雌子牛が上場され、その大半は肥育素牛として取引されています。子牛市場では発育がよく、体格・体型のよい牛が高値で取引される傾向にあることから、濃厚飼料を多給して育成された子牛も多く見られます。しかし、雌牛は去勢牛に比べ皮下脂肪が付きやすく、さらに育成期での濃厚飼料多給は肥育期での食い止まりや枝肉の皮下脂肪厚等との関連も指摘されています。

そこで、黒毛和種雌子牛の栄養度による体格の違いが肥育成績に与える効果を検証し、黒毛和種雌牛の高品質牛肉生産技術について検討しました。

技術の特徴

- 黒毛和種雌子牛（父：安茂勝産子）を用い、公益社団法人全国和牛登録協会栄養度判定基準（1～9段階）に準じて判定し、栄養度5で適度と判定された子牛（標準区）と栄養度6で過肥と判定された子牛（過肥区）に区分します。
- 体重および日増体量等の発育成績には差

表1 格付成績

項目	標準区 (4頭)	過肥区 (4頭)
枝肉重量(kg)	465	483
ロース芯面積(cm ²)	64.8	58.5
バラの厚さ(cm)	8.1	7.8
皮下脂肪厚(cm)	2.6 B	3.9 A
歩留基準値(%)	75.2 a	72.8 b
肉質等級	4.2	3.0
BMS No.	7	5
BCS No.	4	4
BFC No.	3	3
4等級以上の割合(%)	75	25

A,B:P<0.01 a,b:P<0.05

が見られません。

- 超音波肉質診断装置による経時的な皮下脂肪厚は肥育開始から終了までの期間を通して過肥の子牛が厚く推移します。
- 枝肉格付成績の平均値は栄養度が適正な子牛で肉質等級がよい傾向が見られ、4等級以上の割合も高くなります。また、過肥な子牛は皮下脂肪が厚く、歩留基準値も低くなります（表1）。このことから、育成段階から濃厚飼料を多給し皮下脂肪が厚くなると、肥育段階でも皮下に脂肪の動員が優先され、筋肉内に脂肪（サシ）はあまり入らないことがわかります。
- 1頭あたりの販売金額から飼料費を引いた金額は、栄養度が適正な子牛の方が約84,000円程度高くなります（図1）。

今後の取り組み

黒毛和種子牛育成マニュアルの普及推進を図り、育成段階での適正な濃厚飼料給与の定着を目指し、本技術の普及に努めます。

（執筆者：浅田 勉）

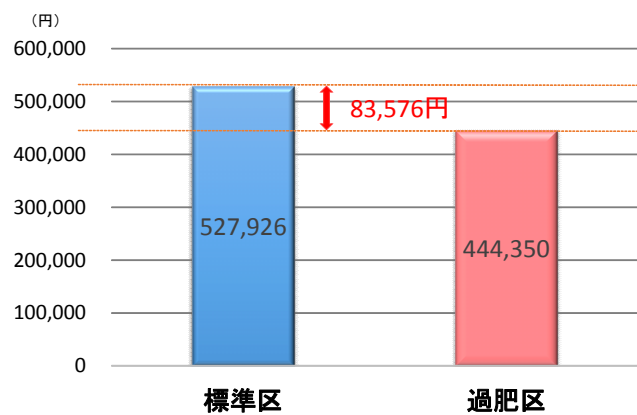


図1 販売金額から飼料費を引いた金額(円/頭)

連絡先：群馬県畜産試験場 肉牛係（電話027-288-2222）